

白居易の詠懐詩について

——抒情と説理の詩境——

埋田重夫

〔一〕 序

中国文学三千年の精華が詩であり、その極致が唐代三百年にあるとの考え方は、今日の通説となっている。初唐・盛唐・中唐・晩唐に活躍した詩人は夥しく、彼らが生み出した詩篇も数多く遺されている。作家と題材と様式の三点は、文学が成立するための必須条件であろうが、唐詩ではそれらの何れもが、漢魏六朝詩の長い伝統を継承しつつ、広大な裾野を形成している。題材に限定してみても、離別・閨怨・辺塞・行旅・飲酒・登覽・遊宴・山水・田園・詠史・懷古・遊仙・挽歌・悼亡・諷諭・閑適・感傷……等々の分野が想起され、その多様な世界には瞠目すべきものがある。

ところでこの詩人と題材の間に親疎関係が認められることは、中国の古典詩を読む上で十分に留意されてよいであろう。例えば李白にとって離別詩は、極めて高い適性を示す題材であったのに対して、杜甫においてそれは、必ずしも不可欠な主題とはなり得ていない。つまり詩人が題材を選択すると同時に、題材もまた詩人を指定しているのである。中唐に登場した白居易は、生涯にあつて多数の題材に挑戦し、それぞれに大きな成果を収めている。今回の論考ではそれらのなかから、特に書懷・言志・感遇を主題とする詠懐詩を取り上げ、詩人と題材の関係について重点的な考察を試みたいと思う。彼は生来的に議論好きであり、論理的

な思考と情緒的な感性とが矛盾無く併存している知識人であるが、その個性が詠懐詩という特定の領域においてどのような相貌を示しているのかは、詩人論・作家論としても興味深い問題を含んでいると言えよう。

〔二〕 詠懐詩の伝統

中国詩史における詠懐詩の起点は、「竹林七賢」として名高い魏の阮籍になる。「詠懐詩十三首」(四言)及び「詠懐八十二首」(五言)である^①。この長大な連作詩では、苦悩に満ちた人生や処世に対する冷徹な分析が、繰り返しなされている。単なる一過性の感情を激情のままに詠い上げるのではなく、自己の内面に厚く沈殿した「懷」いが内省的に語られるのである。この意味で詠懐詩の作者は、確たる思想や理念を有する者であったと言わねばならない。阮籍は魏晋交替の暗黒時代を生き抜いた文人であるが、それだけに総計九十五首の作品の何れも、抒情と説理が交互に切り結ぶ緊張した詩情によつて貫かれている。

梁の蕭統(昭明太子)は、自らが編纂した詞華集『文選』にあつて、わざわざ「詠懐」の部立を設け、その巻二十三の筆頭に、阮籍の詠懐詩十七首を配している。「文選序」末尾に掲げる「事出於沈思、義歸乎翰藻」の入選基準に適合する詩篇として、十七首に及ぶ作品群を収録したことは、文芸批評家たる蕭統の慧眼をよく示している。他に採られた作品が、謝惠連の「秋懷」と歐陽建の「臨終詩」の僅か二首に留まることは、阮籍

詠懐詩に対する並々ならぬ高い評価を表している。かくして中国歴代の文学者達は、詠懐という題材を選択しようとする時、必然的に先行する阮籍の作品が想い起こされることになる。極言すれば彼の文学は、詠懐詩九十五首でもって完結していると判断されよう。それら多くの作例から、通行性の高い三首を引用してみたい。

詠懐八十二首其一

夜中不能寝 夜中に寝ぬる能はず
 起坐彈鳴琴 起坐して鳴琴を弾ず
 薄帷鑑明月 薄き帷は明月に鑑り
 清風吹我衿 清き風は我が衿を吹く
 孤鴻號外野 孤鴻 外野に號び
 翔鳥鳴北林 翔鳥 北林に鳴く
 徘徊將何見 徘徊して將た何をか見ん
 憂思獨傷心 憂思して独り心を傷ましむ

詠懐八十二首其十七

独坐空堂上 独り坐す空堂の上
 誰可與親者 誰か與に親しむ可き者ぞ
 出門臨永路 門を出でて永路を臨むも
 不見行車馬 行く車馬を見ず
 登高望九州 高きに登りて九州を望めば
 悠悠分曠野 悠悠として曠野分かる
 孤鳥西北飛 孤鳥 西北に飛び
 離獸東南下 離獸 東南に下る
 日暮思親友 日暮れて親友を思ひ

晤言用自寫 晤言して用て自ら寫かん

詠懐八十二首其三十三

一日復一夕 一日復た一夕
 一夕復一朝 一夕復た一朝
 顔色改平常 顔色は平常を改め
 精神自損消 精神は自ら損消す
 胸中懷湯火 胸中に湯火を懷き
 變化故相招 變化故に相ひ招く
 萬事無窮極 万事 窮極無く
 知謀苦不饒 知謀 饒からざるに苦しむ
 但恐須臾間 但だ恐る須臾の間に
 魂氣隨風飄 魂氣の風に随ひて飄るを
 終身履薄冰 終身 薄氷を履む
 誰知我心焦 誰か知らん我が心の焦るるを

全て孤高とはなり得ない究極の孤絶を凝視して詠われた作品である。三首に共通する「孤」「独」の重出と深い「憂思」の表白は、彼が身を置いた苛酷で無慈悲な政治環境を抜きにしては、ほとんど全く理解できないであろう。特に「詠懐其三十三」の終末二句「終身履薄冰、誰知我心焦」は、その偽らざる心情の吐露であったと言える。蕭統と同じ梁代に登場した詩論家鍾嶸も、その著書『詩品』において阮籍の五言詩を最高位の「上品」に据え、次のような評定を下している。

其源出於小雅、無雕蟲之功。而詠懐之作、可以陶性靈、發幽思。言在耳目之内、情寄八荒之表、洋洋乎會於風雅、使人忘其鄙近、自致遠大。

頗多感慨之詞、厥旨淵放、帰趣難求、顔延年注、怯言其志。

『詩品』三卷が取り上げる詩人は、漢から梁までの百二十三名であるが、その淵源が『詩経』の「小雅」から出ているとされるのは、阮籍ただ一人のみである。この評言はまた、彼の詠懐詩が中国韻文史の系譜からみても、異質かつ特殊なものであり、表現や詩想が隱微・深遠・放逸であると認識されていたことを物語っている。ほぼ同時代に成立した斉の劉勰『文心雕龍』が、「阮旨遙深、故能標焉」（明詩第六）「嗣宗傲儻、故響逸而調遠」（体性第二十七）の如く、ほぼ同様の指摘をしているのはこの事実の有力な証左となる。

阮籍以前にも漢の仲長統「見志詩二首」、魏の曹植「言志詩」、何晏「言志詩」、嵇康「述志詩二首」の作品があるが、本格的な詠懐文学は、彼の長篇連作詩によつて初めて確立されたと考えてよい。そしてこの題材はその後、直接間接に後代の詩人へと継承されていくことになる。試みに遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』に拠れば、晋朝以降に制作された詠懐詩の総数は六十首に達している。とりわけ宋の鮑照と王素、梁の江淹、北周の庾信に阮籍の模擬詩があることは、「詠懐Ⅱ阮籍」という図式が既に出来上がっていたことを意味している。それだけ彼の存在が大きかったと言えよう。

- 張翼「詠懐詩三首」（晋詩卷十二）○支遁「詠懐詩五首」「述懐詩二首」（晋詩卷二十）○史宗「詠懐詩」（晋詩卷二十）○鮑照「擬阮公夜中不能寐詩」（宋詩卷九）○王素「学阮步兵体詩」（宋詩卷十）○江淹「雜体詩三十首其九、阮步兵籍詠懐」「效阮公詩十五首」（梁詩卷四）○吳均「詠懐詩二首」（梁詩卷十一）○庾信「擬詠懐詩二十七首」「和張侍中述懐詩」（北周詩卷三）「奉和永豐殿下言志詩」（北周詩卷四）。

白居易の詠懐詩について

魏の阮籍を先蹤とする詠懐文学は、これらの詩人達にも受け継がれているが、自己省察を含む複雑な感慨を説くという点では、東晋から劉宋への不安定な変革期を生きた陶淵明の存在を無視することはできないであろう。彼の文学は、詠懐と田園のほぼ二つに絞り込むことが可能であろうが、^④そこでは、不遇な生涯を送った過去の士人群像、固窮に生きる隱士の処世、迫り来る死の超克などが何度も取り上げられ、自らが抱える深刻な問題が追究されている。陶淵明の詩題には詠懐・書懐・述懐などの言葉は認められないが、作品の内容の大半はまさしく詠懐詩そのものであり、貴族主導の六朝期の世界にあつて、独自の存在を主張している。魏晋と晋宋という時代環境も類似しており、彼は間違いなく阮籍に次ぐ詠懐詩人と言える。飢餓に直面しつつも、力強く生き抜く決意を詠う典型的な詩篇一首を掲出してみる。因みに本詩の序には、「旧穀既没、新穀未登。頗為老農、而值年災。日月尚悠、為患未已。登歲之功、既不可希。朝夕所資、煙火裁通。旬日已來、始念飢乏。歲云夕矣、慨然永懷。今我不述、後世何聞哉」とある。本詩を陶氏詠懐詩の代表作とする所以である。

有会而作	会ること有りて作る
弱年逢家乏	弱年にして家の乏しきに逢ひ
老至更長飢	老いの至りては更に長に飢う
菽麦実所羨	菽麦すら実に羨む所
孰敢慕甘肥	孰か敢へて甘肥を慕はんや
怒如垂九飯	怒として九飯に垂ぐが如く
當暑厭寒衣	暑に当たりては寒衣を厭ふ
歲月將欲暮	歲月將に暮れんと欲す

如何辛苦悲 如何せん辛苦の悲しきを
 常善粥者心 常に粥者の心を善しとし
 深念蒙袂非 深く蒙袂の非なるを念ふ
 嗟来何足吝 嗟来は何ぞ吝むに足らん
 徒没空自遺 徒に没して空しく自ら遺へるのみ
 斯濫豈攸志 斯に濫るは豈に志す攸ならんや
 固窮夙所帰 固より窮すは夙に帰する所
 餒也已矣夫 餓えや已ぬる夫
 在昔余多師 在昔には余に師多し

陶淵明晩年の作とされるものであり、躬耕から凶作・貧窮・飢餓へと続く厳しい田園生活で、「会ること有りて作られた」五言十六句からなる古体詩。『礼記』（檀弓）に見える「黔敖」と「蒙袂者」の説話^⑥、そしてまた『論語』（衛霊公）が説く「斯濫」と「固窮」の故事を採用して、自己の体面に拘泥せず（何足吝）、貧なる現況をありのままに受け入れ（餒也已矣夫）、その貧窮のなかを道義的に生き抜く（固窮）という人生観が開陳されている^⑧。陶詩全般に顕著なこうした詩的思索や詩的説理の傾向は、結果として広義の優れた詠懐詩を量産させる契機になったと推測される。この意味からも、陶淵明は「哲理的詩人」と呼ぶのに相応しい。

阮籍から陶潜へと到る詠懐詩の水脈は、唐代に入ると初唐の陳子昂の「感遇詩三十八首」（『全唐詩』巻八十三）、盛唐の張九齡「感遇十二首」（同前巻四十七）、盛唐の李白「古風五十九首」（同前巻百六十一）、盛唐の杜甫「自京赴奉先縣詠懷五百字」（同前巻二百十六）「詠懷古跡五首」（同前巻二百三十）の如く一気に拡大していく。特に詩聖杜甫が五百字に及ぶ長篇の五言古体詩や五首連作の七言律詩で詠懐詩を制作したことは、唐代詩史の観点からも大きな意義を持つ。古体詩型や連作形式で詠われること

が多かった詠懐詩の伝統に、長篇化や近体詩という斬新な詠法を導入したからである^⑩。

このように盛唐までの詩人によって試作されてきた詠懐詩は、続く中唐の白居易によって画期を迎えることになる。説理的抒情性を主たる作風とするこの詩人の登場は、従来までの詠懐という題材に一層の厚みと深みを与えることになるのである。次節以降では個々の作品に即しながら、白居易詠懐詩の諸相について、さらに考察を加えていきたい。

〔三〕 白居易詠懐詩の制作状況

結論から言えば、作者の何かしらの「懐」いを「詠」う詠懐詩は、飲酒・登高・経世・自適・感傷・歳時等々、複数の題材にまで架橋し伸張している。先に述べた東晋の陶淵明は、そのわかりやすい先例と言える。そしてそれら全てを広義の詠懐詩とするならば、詩題に詠懐・書懐・述懐・論懐・吟懐・言懐・写懐・遣懐・感懐さらには詠意・書意・自解・自覚などの語を含み、なおかつ一首全体が説理的性格を帯びる作品を、狭義の詠懐詩と規定することが可能となろう。白居易の詠懐文学は、これら狭義の詩篇を中心として、その周縁を有懐・旅懐・病懐・秋懐・秋意・秋思・道情・叙誠・書誠の詩題を含む詩篇が取り囲み、さらにその外側に飲酒詩や閑適詩に代表される各種の題材群が、いわば同心円状に拡がっていると考えてよいであろう。本稿ではこのうち狭義の詠懐詩に焦点を絞って検討し、その他必要に応じて広義の作例にも言及していくこととする。確認できた純粹な白氏詠懐詩五十五首について、制作された年令・場所・詩型を列挙すれば以下のようなことになる。狭義の詠懐詩の範囲を確定させることで、全体の傾向と特色が自ずと明らかになると思われる。因みに作品の配列は時系列に拠っている。

○「自河南經亂、閔內阻飢、兄弟離散、各在一處。因望月有感、聊書所懷、寄上浮梁大兄、於潛七兄、烏江十五兄、兼示符離及下邳弟妹」〔0691〕（二十七歲頃・洛陽・七律）○「秋暮郊居書懷」〔0685〕（二十九歲以前・場所不明・五律）○「代鄰叟言懷」〔0690〕（二十九歲以前・場所不明・七絕）○「別元九後詠所懷」〔0404〕（三十六歲・長安・五古）○「早秋曲江感懷」〔0406〕（三十七歲・長安・五古）○「秋居書懷」〔0198〕（三十九歲・長安・五古）○「詠懷」〔0729〕（三十九歲・長安・七絕）○「初與元九別後、忽夢見之。及寤而書適至、兼寄桐花詩。悵然感懷、因以此寄」〔0421〕（三十九歲・長安・五古）○「自覺二首其一」〔0483〕（四十歲・下邳・五古）○「遣懷」〔0230〕（四十歲から四十三歲まで・下邳・五古）○「聞庾七左降、因詠所懷」〔0242〕（四十一歲・下邳・五古）○「自吟拙什、因有所懷」〔0256〕（四十一歲・下邳・五古）○「論懷」〔0472〕（四十一歲から四十二歲まで・下邳・五古）○「李十一舍人松園飲小酌酒、得元八侍御詩、序云、在臺中推院、有鞠獄之苦。即事書懷、因酬四韻」〔0838〕（四十四歲・長安・七律）○「端居詠懷」〔0944〕（四十五歲・江州・七律）○「詠懷」〔0291〕（四十五歲から四十六歲まで・江州・五古）○「詠意」〔0298〕（四十五歲から四十六歲まで・江州・五古）○「香鑪峯下新置草堂、即事詠懷、題於石上」〔0303〕（四十六歲・江州・五古）○「詠懷」〔0970〕（四十六歲・江州・七律）○「詠懷」〔0328〕（四十七歲・江州・五古）○「自到潯陽、生三女子、因詮真理、用遣妄懷」〔1087〕（四十七歲・江州・七律）○「遣懷」〔1031〕（四十九歲・江州・七律）○「遣懷」〔0561〕（四十九歲・忠州・五古）○「初除主客郎中知制誥、與王十一・李七・元九三舍人中書同宿、話旧感懷」〔1215〕（四十九歲・長安・七律）○「西掖早秋直夜書意」〔0567〕（五十歲・長安・五古）○「衰病無趣、因詠所懷」〔0576〕（五十一歲・長安・五古）○「詠懷」〔0359〕（五十一歲・杭州・五古）○「閑夜詠懷、因招周協律・劉・薛二秀才」〔1334〕（五十一歲・杭州・七律）○「臘後歲前、遇景詠意」〔1339〕（五十一歲・杭

州・七律）○「錢湖州以簪下酒、李蘇州以五醖酒、相次寄到。無因同飲、聊詠所懷」〔1341〕（五十一歲・杭州・七律）○「翫新庭樹、因詠所懷」〔0370〕（五十三歲・杭州・五古）○「去歲罷杭州、今春領吳郡、慚無善政、聊寫鄙懷、兼寄三相公」〔2417〕（五十四歲・蘇州・五排）○「詠懷」〔2481〕（五十五歲・蘇州・七律）○「重詠」〔2482〕（五十五歲・蘇州・五律）○「出使在途、所騎馬死、改乘肩輿、將婦長安、偶詠旅懷、寄太原李相公」〔2557〕（五十七歲・洛陽・七律）○「微之就拜尚書、居易統除刑部、因書賀意、兼詠離懷」〔2581〕（五十七歲・長安・七律）○「戊申歲暮詠懷三首其一」〔2713〕（五十七歲・長安・七律）○「戊申歲暮詠懷三首其二」〔2714〕（五十七歲・長安・七律）○「戊申歲暮詠懷三首其三」〔五十七歲・長安・七律）○「詠懷」〔2984〕（六十三歲・洛陽・五古）○「詩酒琴人、例多薄命、予酷好三事、雅當此科、而所得已多、為幸斯甚。偶成狂詠、聊寫愧懷」〔3162〕（六十三歲・洛陽・七排）○「晚婦香山時、因詠所懷」〔2988〕（六十四歲・洛陽・五古）○「詠懷」〔2993〕（六十四歲・洛陽・五古）○「詔授同州刺史、病不赴任、因詠所懷」〔3224〕（六十四歲・洛陽・五排）○「詠懷」〔3232〕（六十四歲・洛陽・七律）○「同夢得和思黯見贈、來詩中先叙三人同讌之歡、次有歎髮髮漸衰、嫌孫子催老之意。因繼妍唱、何兼吟鄙懷」〔3390〕（六十七歲・洛陽・七律）○「書事詠懷」〔3401〕（六十八歲・洛陽・五排）○「病中詩十五首其十五、自解」〔3422〕（六十八歲・洛陽・七言六句）○「時熱少見客、因詠所懷」〔3455〕（六十九歲・洛陽・五排）○「老病幽獨、偶吟所懷」〔3461〕（六十九歲・洛陽・七律）○「感秋詠意」〔3460〕（七十歲・洛陽・七律）○「楊六尚書頻寄新詩、詩中多有思閑相就之意。因書鄙意、報而論之」〔3495〕（七十歲・洛陽・七律）○「每見呂・南二郎中新文、輒竊有所歎惜、因成長句、以詠所懷」〔3639〕（七十三歲から七十四歲まで・洛陽・七律）○「齋居春久、感事遣懷」〔3638〕（七十四歲・洛陽・五排）。

生涯における制作状況については、二十七歳で作られた「自河南經亂、闕內阻飢、兄弟離散、各在一處。因望月有感、聊書所懷、寄上浮梁大兄、於潛七兄、烏江十五兄、兼示符離及下邳弟妹」〔0691〕が初出であり、死の前年となる七十四歳に詠われた「齋居春久、感事遺懷」〔3638〕が最後の作品として指摘できる。白氏の詠懷詩は、離別・戦亂を述べる詩から始まり、閑適・惜春を説く作で終わったのである。二十代（三首）、三十代（五首）、四十代（十七首）、五十代（十五首）、六十代（十一首）、七十代（四首）という分布を示しており、人生の蹉跎を経験するに従って漸次多作されていることがわかる。特に四十代は骨肉の喪失や江州への左遷など、彼の身边に深刻な出来事が連続して発生しており、そのことが詠懷詩の創作へと駆り立てる大きな契機になったことは否定できないであろう。詠懷詩は自らの人生を真剣に検証する過程で生み出されたのである。

次に個々の詩篇が作られた場所であるが、長安（十三首）、下邳（六首）、江州（八首）、忠州（一首）、杭州（五首）、蘇州（三首）、洛陽（十七首）、不明（二首）となっており、長安勤務と洛陽分司の突出と併行して、丁憂期の下邳、貶謫時の江州での制作の多さが改めて注目される。身心の負的環境下にあつて、詠懷詩は確かに彼の支えになったと推量されよう。

最後に採用された詩型の特徴では、五古（二十二首）、七絶（二首）、七言六句（一首）、五律（二首）、七律（二十二首）、五排（五首）、七排（一首）となっており、五絶と七古での作例が皆無であることが眼を引く。題材の心象構造と詩型の表現機能という観点からも留意される。白氏詠懷詩は、五言古体詩および七言律詩との親和性が極めて高く、この様式選択には恐らく、居易自身の明確な意志が働いているよう。数ある詩型のなかでも総じて五言古体詩は、成立の初期から、美刺諷諫に繋がる公的な政治理念の表明、あるいはまた、人生を如何に生きるべきかなど私的な処世観を開陳する様式として用いられてきた。人生や社会における道理・

原理・条理を説くのに、最も高い適性を示す詩型として、中国の文学者に認識されてきたのである。これに対して七言律詩は、杜甫の出現によって急速に進展した詩型であり、その事実は例えば、七律連作「詠懷古跡五首」の完成度をみても容易に理解される。先駆けとも言える杜甫を引き継ぐ形で、白居易が七言律詩による詠懷詩を多数制作していることは、詩歌の継承と発展という観点からも注視されよう。

ここまで述べてきた全体の創作傾向を踏まえた上で、次節ではその内容や詠法の具体的検討に入りたいと思う。そして最終的には、白居易の人生において詠懷詩が果たした役割について、確認できた複数の論点を提出してみたい。

〔四〕 白居易詠懷詩の考察

白氏詠懷詩五十五首は、説理と抒情の交錯が最もわかりやすい形で現れる作品と言つてよい。そしてこの説理的抒情性は、平易・通俗・暢達と評される作風と並んで、居易の文学に一貫して認められる際立った特色でもある。それらの作品を通して最初に指摘できることは、三十歳以前に作られた詩篇に、早くも白居易の個性が色濃く滲み出ているという事実である。既に述べたように、科挙及第前の無名時代の詠懷詩は、合計三首を数える。そしてその何れもが、七律・五律・七絶などの近体詩型を採用している。貞元十六年二十九歳以前に制作されたと考えられる五言律詩「秋暮郊居書懷」〔0685〕では、自らの貧と病について「貧家愁早寒」「書卷病仍看」と述べ、最終二句を「若問生涯計、前溪一釣竿」で結ぶ。季秋から孟冬へと移り変わる時節に、自己の生はての涯を見据えた感慨が吐露されている。そしてまた、ほぼ同じ頃に作られた七言絶句では次の様に詠う。

①「人生何事心無定、宿昔如今意不同。宿昔愁身不得老、如今恨作白頭翁。」〔代鄰叟言懷〕〔690〕。

鄰に住む叟になり代わり、その懐いを述べたもの。起句と承句では、人間の「心」「意」の変わり易さを提起し、続く転句と結句では、「宿昔」と「如今」が対比される。若かった昔は、自らの身体が老境を迎えることができないのではないかと悲しみ、老いさらばえた今では、すっかり白髪のお翁に変わってしまったことを悔やんでいる。傍点部分に示した連鎖は、七言音数律「○○○○・○○○」が持つ頭重脚軽四拍子の軽快な節奏とも連動して、まるで流水のような激みない心象を作り上げていく。連鎖と対偶こそは白居易が最も得意とした二大修辭技法である。ここで詠出される詩的説理は、時間への鋭敏な感覚を基礎としており、確かに後年多作される詠懐詩の特徴をよく表している。この意味で、悲秋を主題とする「早秋曲江感懷」〔406〕「感秋詠意」〔346〕も無視できないが、ここでは①と同じく過去と現在を対照させて、人生への思索を深めた一首を紹介してみる。長慶二年五十一歳、杭州刺史在任の時に作られた五言古体詩である。杭州時代における詠懐詩の代表作に位置づけられる『白氏文集』巻八閑適四に収められる。

②「昔為鳳閣郎、今為二千石。自覺不如今、人言不如昔。昔雖居近密、終日多憂惕。有詩不敢吟、有酒不敢喫。今雖在疎遠、竟歲無牽役。飽食坐終朝、長歌醉通夕。人生百年内、疾速如過隙。先務身安閑、次要心歡適。事有得而失、物有損而益。所以見道人、觀心不觀跡。」〔詠懷〕〔359〕。

昔↓今↓今↓昔↓昔↓今と時間軸を連鎖変換させながら、長安の中舎

白居易の詠懐詩について

書人（鳳閣郎）と杭州の刺史（二千石）の価値が、理論的に比較検討されている。中書舎人から杭州刺史への外任転出は、当時の長安における政治力学にあつて、実質的には左遷貶謫を意味しており、本詩がその複雑で屈折した心情を背景に詠われていることを見逃してはならないだろう。ここでは白居易五十代の閑適観の枢要が、自己説理的に述べられている。人生は一瞬だから、先ず身の安閑に務め、次に心の歡適を要める。そしてこの世の事物には得失損益が付きものだから、心の状態をよく観て、結果として後から付いてくる跡は、極力観ないようにする。

白居易は自分の主体的な努力によって管理できるもの（主観たる心）と管理できないもの（客観たる跡）とを、厳密に区分して詩的説理や詩的思想を展開していく。②は詠懐と閑適という二つの題材が通底し、この詩人独自の説理的抒情性が發揮されている作例と考えられよう。このように彼の詠懐詩が、時間の推移や人生の一回性という重い課題に対処するために機能していることは、特に強調されてよいと思われる。そしてその萌芽は、詩人として出発した二十代に早くもあつたと言える。

次に言及すべきは彼の詠懐詩が、自己の身心を苛め蝕む過酷な生活環境のもとで、より多くより積極的に作られているという点である。こうした負的狀況下の第一に挙げられるのは、家族との死別に象徴される深刻な喪失体験である。居易の母陳氏は元和六年四月三日に、長安宣平里邸において五十七歳で死去し、丁憂中の同年冬には、続いて三歳の長女金鑿が渭村下邨宅で夭逝する。生来多情多感な白居易にとって、突然にしかも連続して襲った骨肉との死別離は、堪え難い悲哀と苦痛を与えたと考えられる。そしてこの激しい情念の嵐の直中であつて、自己省察の所産としての詠懐詩が次々と生まれるのである。愛する対象を失った苦しみを詠う次の二首は、下邨服喪期の典型作品となつている。

③「朝哭心所愛、暮哭心所親。親愛零落尽、安用身独存。幾許平生歎、無限骨肉恩。結為腸間痛、聚作鼻頭卒。悲來四支緩、泣尽双眸昏。所以年四十、心如七十人。我聞浮圖教、中有解脫門。置心為止水、視身如浮雲。斗藪垢穢衣、度脫生死輪。胡為恋此苦、不去猶逡巡。廻念發弘願、願此見在身。但受過去報、不結將來因。誓以智惠水、永洗煩惱塵。不將恩愛子、更種憂悲根。」（自覺二首其二（484））。

④「寓心身体中、寓性方寸内。此身是外物、何足苦憂愛。况有假飾者、華簪及高盖。此又踈於身、復在外物外。操之多惴慄、失之又悲悔。乃知名與器、得喪俱為害。頽然環堵客、蘿蕙為巾帶。自得此道来、身窮心甚泰。」（遣懷（0230））。

③の書き出しでは、愛・親・親愛と関鍵となる言葉を繋げ、本詩の主題を明確に提示する。続く四句「結為腸間痛、聚作鼻頭卒。悲來四支緩、泣尽双眸昏」では、印象深い身体表現を敢えて四つ重ねることで、喪に服する作者の苦しみが強調されている。そしてその悲痛を少しでも軽減しようとして、仏教が説く解脱へと思いが到るのである。詩の後半にみえる誓願の言葉に再び連鎖表現を用いたことは、単なる偶然ではないであろう。確信的な修辭法によって仏教の深遠な教理が説き起こされ、結末二句の決意「不將恩愛子、更種憂悲根」へと結ばれている。同じく④では心と身と性を相対化させつつ、富・貴・名に象徴されるものの本質を冷静に分析し、終には「自得此道来、身窮心甚泰」の達観を手に行っている。この作家にとって眼前にある悲哀や苦痛を詩に詠うことは、自らの身心の蘇生や賦活を企図する上でも、ほとんど必須の営みであったことがわかる。ここでは確かに、情が理によって知的に統御されている。

詠懐詩が果たすこうした自己蘇生の機能は、天子側近の官僚として生きんとする白居易が、政治的失脚を体験した際にも強く作用することに

なる。彼の政治人生における最大の試練は、元和十年四十四歳で味わった江州司馬への左遷であったと思われるが、第二に取り上げたいのは、この江州時代に詠われた一連の詠懐詩である。例えば「香鑪峯下新置草堂、即事詠懐、題於石上」⁽⁰³⁰⁾では香鑪峯の北、遺愛寺の西に造営した廬山草堂での生活が克明に描かれ、その閑適の世界を構成する要素となる白石・清流・松竹・茶園・飛泉・白蓮・酒・琴等々を並列させた後で、「興酣仰天歌、歌中聊寄言。言我本野夫、誤為世網牽。時來昔捧日、老去今帰山。倦鳥得茂樹、涸魚反清源。捨此欲焉往、人間多險難」と結論づけている。またこれとは別に政治の中心、権力の中核である帝都長安から追放された身の上に言及する二首では、次の様に詠われる。

⑤「常聞南華經、功勞智憂愁。不如無能者、飽食但遨遊。平生愛慕道、今日近此流。自來潯陽郡、四序忽已周。不分物黑白、但與時浮沈。朝飡夕安寢、用是為身謀。此外即閑放、時尋山水幽。春遊慧遠寺、秋上庾公樓。或吟詩一章、或飲茶一甌。身心一無繫、浩浩如虛舟。富貴亦有苦、苦在心危憂。貧賤亦有樂、樂在身自由。」（詠意（0298））。

⑥「冉求與顔淵、卞和與馬遷。或羅天六極、或被入刑殘。顧我信為幸、百骸且安全。五十不為夭、吾今欠數年。知分心自足、委順身常安。故雖窮退日、而無戚戚顔。昔有榮先生、從事於其間。今我不量力、拳心欲攀援。窮通不由己、歡戚不由天。命即無奈何、心可使泰然。且務由己者、省躬諒非難。勿問由天者、天高難與言。」（詠懐（0328））。

⑤では『莊子』雜篇列御寇第三十二の典故¹²⁾を援用しながら、世俗的に無能な人材は拘束の無い自由な日々が過こせると説き、「富貴亦有苦、苦在心危憂」「貧賤亦有樂、樂在身自由」と豪語してみせる。富貴と貧賤、苦と樂、心と身、危憂と自由をそれぞれ対照させつつ、現状を肯定する

積極的な意味づけがなされている。続く⑥では再求(再耕)・顔淵・卞和・司馬遷・榮啓期といった先人の例を引きながら、彼らと自分の境遇とを比較した結果、先ず「知分心自足」「委順身常安」の二つの原理を提示する。そしてさらに検討を進めて、「窮通不由己」「歡戚不由天」「命即無奈何」「心可使泰然」「且務由己者」という五つの道理を再確認する。詩を詠う過程で紡ぎ出されたこれら七つの処世観は、確かに白居易を取り巻く現実世界への不満・不快・不適といった感情を手懐け鎮静化させることに成功していると言えよう。主観と客観は截然と分離して位置づけられ、今ある自分にできることが模索されるのである。

骨肉のための服喪と江州への貶謫に続いて第三に挙げるべきは、自らの身体の衰老や疾病を取り上げる詠懐詩である。この種の作例は全五十五首中二十四首の多きを占めている。日々衰残していく身体もまた、この詩人には看過できない詩材であったと言える。年齢に従って劣化していく自己の身体を正視することは、概して苦痛以外の何物でもない。しかし白居易におけるそれは、自身の心を滅入らせるものではなく、むしろ逆に生きる確かな力を手に入れる有効な手段であったようである。この点については彼自ら以下のように説いている。

⑦「房伝往世為禪客、王道前生心畫師。我亦定中觀宿命、多生債負是歌詩。不然何故狂吟詠、病後多於未病時。」(「病中詩十五首其十五、自解」〔342〕)。

ここでは詩人の前世を話題にし、房瑄の禪客や王維の画師に触れた後で、病後の方が未病の時よりむしろ詩作が多いと述べ、その理由を前世からの宿命によって詩歌と結ばれているからだと断じている。彼には悲しみ・喜び・苦しみ・痛みの全てが、主体的に詠うべき対象であったの

である。居易が自分を詩魔と称する所以である。老と病に対峙して詠じられた詩篇を四首だけ紹介してみる。

⑧「四十未為老、憂傷早衰惡。前歲二毛生、今年一齒落。形骸日損耗、心事同蕭索。夜寢與朝飧、其間味亦薄。同歲崔舍人、容光方灼灼。始知年與貌、衰盛隨憂樂。畏老老轉迫、憂病病彌縛。不畏復不憂、是除老病藥。」(「自覺二首其一」〔0483〕)。

⑨「朝飧多不飽、夜臥常少睡。自覺寢食間、都無少年味。平生好詩酒、今亦將捨棄。酒唯下藥飲、無復曾欲醉。詩多聽人吟、自不題一字。病姿引衰相、日夜相繼至。況尚尚少朝、彌慙居近待。終當求一郡、聚少漁樵費。合口便歸山、不問人間事。」(「衰病無趣、因詠所懷」〔0576〕)。

⑩「日覺双眸暗、年驚兩鬢蒼。病心無處避、老更不宜忙。徇俗心情少、休官道理長。今秋歸去定、何必重思量。」(「重詠」〔2482〕)。

⑪「眼漸昏昏耳漸聾、滿頭霜雪半身風。已將心出浮雲外、猶寄形於逆旅中。觴詠罷來賓閣閉、笙歌散後妓房空。世緣俗念消除尽、別是人間清淨翁。」(「老病幽獨吟所懷」〔3461〕)。

四十歳から六十九歳までの三十年間に作られた詠懐詩であり、どれも老病を一对の詩材にしている点に特色がある。白居易は生まれながらに頑健な体質ではなく、一生の間に様々な病氣を患っている。そして「乘衰百疾攻」(「病中詩十五首其一、初病風」〔3408〕)という厳しい状況のなかで、病氣と共存しながら「一病息災」「柳に雪折れ無し」の生涯を送ったのである。恐らくその多情多感もまた、この身体状況から必然的に招来されたものと思われる。服薬や睡眠が折々の病を癒したのと同様か或いはそれ以上に、詩作が彼の身心を上向させる大きな拠り所になっていたことは、例えば以下の詩句からも窺い知れよう。

始知年與貌 始めて知る年と貌と
 衰盛隨憂樂 衰盛は憂樂に隨ふを
 畏老老轉迫 老を畏るれば老はま転々迫り
 憂病病彌縛 病を憂ふれば病はま彌々縛す
 不畏復不憂 畏れず復た憂へず
 是除老病藥 是れ老病を除くの藥

蟬聯体が有する文字鎖の修辭法を駆使しつつ、生存する限り不可避な老病への対処法が、自分を納得させる形で叙述される。詩歌の言語と韻律に即しながら、一つ一つの現象が生起する筋道（道理）が丁寧に分析される。この種の詩作傾向は程度の差こそあれ、その他の詩句「病応無処避、老更不宜忙」「已將心出浮雲外、猶寄形於逆旅中」「世緣俗念消除尽、別是人間清淨翁」にも認められるものであり、白居易における詠懐詩の意義を端的に示している。ここでも詩作と思索は分かち難く結び付いており、生きていく上で必要な意味や価値が、詩歌創作の過程で次々と産出されていることがわかる。

白氏詠懐詩で最後に論じなければならぬのは、自らの死生観に触れる作品である。如何に生きて如何に死ぬかは、居易が終生抱えていた喫緊の課題であり、当然ながらこの題材詩にも濃い影を投げ掛けている。東晋の陶淵明も死生を探究した文学者であるが、中唐の白居易はその直系の継承者であったと考えられよう。関係する四首を掲出してみたい。

⑫「黒頭日已白、白面日已黒。人生未死間、變化何終極。常言在己者、莫若形與色。一朝改変来、止遏不能得。况彼身外事、悠悠通與塞。」
 （論懐）〔0472〕。

⑬「羲和走馭趣年光、不許人間日月長。遂使四時都似電、争教兩鬢不成

霜。榮銷枯去無非命、壯尽衰来亦是常。已共身心要約定、窮通生死不驚忙。」〔遺懐〕〔1031〕。

⑭「我知世無幻、了無干世意、世知我無堪、亦無責我事。由茲兩相忘、因得長自遂。自遂意以貫、閑官在閑地、閑地唯東都、東都少名利。閑官是賓客、賓客無牽累。嵇康日日懶、畢卓時時醉。酒肆夜深歸、僧房日高睡。形安不勞苦、神泰無憂畏。從官三十年、無如今氣味。鴻雖脫羅弋、鶴尚居祿位。唯此未忘懷、有時猶内愧。」〔詠懐〕〔2984〕。

⑮「我年日已老、我身日已閑。閑出都門望、但見水與山。閑塞碧巖巖、伊流清潺潺。中有古精舍、軒戸無扃闔。岸草歇可籍、逕蘿行可攀。朝隨浮雲出、夕與飛鳥還。吾道本迂拙、世途多險艱。嘗聞嵇呂輩、尤悔生疎頑。巢悟入箕穎、皓知返商顏。豈唯樂肥遁、聊復祛憂患。吾亦從此去、終老伊嵩間。」〔晚歸香山時、因詠所懐〕〔2988〕。

近体と古体の差異はあるものの、對偶と連鎖を併用して、自己の死生観を確認する点では一致している。時間の前に脆弱な人間の姿を、移りゆく身体相の変化で象徴させ、自らが所有するはずの肉体さえ儘ならぬ現実から、人生の命運に抗うことの無意味さを説く⑫。同じく時間の瞬間性を踏まえて「榮銷枯去無非命、壯尽衰来亦是常」と述べ、己が身心に對して「窮通生死不驚忙」と誓わせる⑬。また東都太子賓客分司によつて保証される形神安泰の生き方を肯定的に詠う⑭。伊水を眼下に臨む香山寺の風景を描写した後で、「吾道本迂拙、世途多險艱」と感慨を漏らし、この場所こそが我が終老の地と見定める⑮。

これら四首の詩情には等しく、対象への知的な理解や認識が働いており、なかつた深い思索と内省は、白居易の詠懐詩を一層豊饒なものにしており、なかつたこの題材詩が本来的に含み持つ表現機能——説理的抒情性——を最大限に高めていると考えてよい。死生を巡る深刻な問題を取り

上げる詠懐詩が、白居易にとって自らが生きる方向を指し示す大きな力になったことは疑問の余地がない。^⑤ ここには確かに情を理によって統制し管理する独自の詩境が顕現している。

〔五〕 結語

中国文学史にあつて長い伝統を有する詠懐詩。その始原となる阮籍の作品は、合計九十五首の連作詩であり、『文選』卷二十三詠懐の部には十七首が収められている。この事実は中国歴代の文学者が同じ題材を選択する際に、先行する阮籍の存在を強く意識せざるを得ないことを意味している。彼の詠懐詩では、幸福の喪失は必然のものであり、時間の推移や人間の怨毒を嫌悪し、世界を蔽う不幸の原因が過剰なものへの執着にあると説いている。^⑥

そのような重い伝統のある題材に対して、白居易は二十代の早い時期から作詩を開始し、骨肉の度重なる喪失、地方閑職への左遷、衰老疾病の襲来、死生への洞察などを転機にして、数多くの優れた詠懐詩を作っている。時間の推移や人生の一回性に触発されて、人が生きていく過程で不可避な難題を理的に考察し、そこからあるべき道理を探り当て、人生を肯定し再受容するのである。この点は孤独・絶望・焦慮・悲哀・嫌悪・懷疑といった下降方向の幽暗な感情を詠い続ける阮籍と大きく異なっている。白居易は詠懐詩のなかで情を抒べ、論を重ね、理を説き、そして最終的には身心の蘇生や賦活までも獲得している。この題材詩もまた白居易の個性と資質とを、見事に体现するものとしてあつたと考えられよう。

〔註〕

① 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局、一九八三年九月）〔全三

冊〕上冊、魏詩卷十。

② 『文選』では「翔鳥」を「朔鳥」に作る。

③ 『文選』では「親」を「飲」に作る。

④ 田部井文雄・上田武『陶淵明集全釈』（明治書院、二〇〇一年一月）『陶淵明集』解題十一頁～十六頁の指摘に拠る。

⑤ 袁行霈『陶淵明集箋注』三〇七頁（中華書局、二〇〇三年四月）では、「詩曰、老至更長飢。頭係老年所作。王瑤注、遼欽立注皆繫於宋文帝元嘉三年丙寅（四二六）、為是。是年天下大旱且蝗」と説き、陶淵明七十五歳の作とする。

⑥ 「齊大饑。黔敖為食於路、以待餓者而食之。有餓者、蒙袂輯屨、貿貿然來。黔敖、左奉食、右執飲、曰、嗟、來食。揚其目而視之曰、予唯不食嗟來之食、以至於斯也。從而謝焉、終不食而死。曾子聞之曰、微與。其嗟也可去、其謝也可食」。

⑦ 「在陳絕糧、從者病、莫能興。子路愠見曰、君子亦有窮乎。子曰、君子固窮、小人窮、斯濫矣」。

⑧ 詳細は松浦友久「陶淵明の『有会而作』について——『嗟來說話』と『固窮説話』の機能の異同を中心に」（松浦友久著作選Ⅱ『陶淵明・白居易論 抒情と説理』、研文出版、二〇〇四年六月）を参照。

⑨ その他の作例としては「写懐二首」（『全唐詩』卷二二二）「詠懐二首」（同前卷二二三）が指摘できる。

⑩ 同様の指摘は松原朗『漢詩の流儀 その真髓を味わう』（大修館書店、二〇一四年十一月）の七十五頁～七十六頁でもなされている。

⑪ 白居易の杭州刺史転出が左遷であった事実については、芳村弘道『唐代の詩人と文献研究』（中国藝文研究会、朋友書店、二〇〇七年六月）第三章「知制誥・中書舍人から杭州刺史への転出」第四章「杭州刺史時代」で犀利な考察がなされている。併せて参照されたい。

⑫ 「……巧者勞而知者憂。無能者無所求。飽食而遨遊。汎若不繫之舟。虛而遨遊者也」。

⑬ 白居易の詠懐詩が言及する他の先人としては、賈誼・張翰・屈原・嵇康・畢卓・阮籍・呂安・巢父・四皓・尚平・向長・陸賈・陶潛・房瑄・王維が挙げられる。

⑭ 因みにこれ以外で死生に言及する詩篇としては、「……為学空門平等法、先齐老少死生心」(「歳暮道情二首其一」(0898))が指摘できる。

⑮ 白居易の別集である『白氏文集』大集は、総計十三回を数える作品編集を経て完成されるが、長慶四年五十三歳の時の第三次編集(『白氏長慶集』五十巻の完成)では、諷諭・閑適・感傷・雑律という四種分類が採用されている。この時点での分類基準に従って詠懐詩(五言古体)をみてみると、閑適十首感傷九首という分布になっている。白居易の詠懐詩は閑適詩と感傷詩の相互に跨がっており、この事は重要な示唆を与えていると思われる。彼にとって詠懐とは、閑適と感傷の何れにも特化できない一つの独

立した必須の題材であったことを予想させるからである。

⑯ 「阮籍詠懐詩が持つ特色と傾向については、吉川幸次郎「阮籍の詠懐詩」について」(『吉川幸次郎全集第七巻』、筑摩書房、一九八四年九月)を参照。白居易詠懐詩との詩想の違いが特に注意される。また阮籍と白居易の詠懐詩に、飲酒の描写が極端に少ないことも留意されよう。これはまさしく詠懐詩が、覚醒の文学であることを明示しているからである。

(静岡大学大学院人文社会科学領域教授)